

野口裕二〔著〕

増補 アルコホリズムの社会学

——アディクションと近代

文庫判・筑摩書房〔ちくま学芸文庫〕

2024年11月刊

定価1,320円（税込）

評者＝岩倉 拓(あざみ野心理オフィス)



本書を読むことは、自らの臨床を振り返り、その立ち位置を俯瞰するとともに、自らの視点の根幹を再考する貴重な機会となるだろう。本書はアルコール依存症をめぐる治療論，社会的問題を多角的に分析した重要な著作である。アルコホリックの臨床の社会的な定義，治療の歴史を概観し，背後にあるスティグマ，医療化の問題，共依存などの関係性の問題，さらには家族や地域との関係と焦点を移しながら，医療化と脱医療化の間で揺れ動く治療の変遷を描き出し，近代の「自己像」が持つ陥穽へと論が進んでいく。さらに，今回の増補版では初版以降の社会状況の変化や研究の進展を踏まえ，より現代的な視点が加わった。

各臨床家の視点や経験によって注目するポイントは異なるだろうが，私は特に専門家支配と非専門家（当事者）という古典的で現代的な問いに目を引かれた。これは現在も日常的に私たちが直面している問題でもあり，医療や心理士が，患者・クライアントを“診断”し，ある治療やプログラムに当てはめることにより，「専門家支配」を強化し，患者の主体を奪い，結果的に回復の道を遠ざけるリスクに注目させる。

一方で，野口は脱医療化，そして当事者が生成してきた治療モデルとして，アルコホリクス・アノニマス（AA）のようなセルフヘルプグループモデルの重要性を強調する。AAは，当事者同士が支え合い，問題へのコントロール喪失を認め，回復を目指すアプローチを取る。このアプローチは，従来の医療モデルとは異なる可能性を秘め，長年にわたり風雪に耐え，その効果を示している。

私が地域支援の臨床実践で感じるのは，まだ事例化していない多くの問題が潜在していることである。これは私たち心理士の重要な仕事であり，広大な未開の領域を残している。野口は，治療における「ネットワーク」の重要性を強調する。個別の患者を超え，家族や社会とのつながりから考える視点は，治療論と実践が

一致していると感じさせる。例えば，野口は，保健所を中心とした地域ネットワークモデルを検証している。患者・クライアントの閉じた世界から新たな居場所を作り，次の段階として新たな地平を開くことを，「代替機能」そして「創造機能」と分類する。「初期介入→行動修正→社会復帰」という段階の分類と介入の試行も臨床的に有効であることを感じた。

潜在的な問題を取り巻く「ファースト・クライアント」や「支援者支援」への介入の大切さも実感するところである。主訴を自覚し，来談するまで待つ個人療法モデルへの批判として，この点は重要である。本書を推薦する信田さよ子との臨床的対話を思い出す。個人療法モデルの限界について考えていた私が，個人療法の準備期として「0期」と口にする，信田が「私の臨床は常に0期」と断じたのが10年以上前である。今になってその言葉の意味が明確に理解できる。

後半の論考では，「自立した主体的な個人」という近代的な自己モデルへの問いと疑念が含まれている。私が実践してきた精神分析は，その理想的な「自己」に過度に依存してきたかもしれない。それが患者への無自覚な圧力になってきたのではないだろうか，さらに言えば，その理想的な自己という幻想自体が事の本質だったのかもしれない，という問いが湧いてきた。治療者も「治療的無力」とクライアントとの同じ地平に開かれる必要があることを本書は伝えている。

文庫版あとがきで，「対話的關係」と「無知の姿勢」に言及していることが興味深い。「治療」という権力性を超え，患者や家族と共に問題を共有し，対話を通じて解決を図る姿勢に到達したのだろう。この視点と感覚は，現代の心理臨床の独自性においてますます重要となっている，と私は感じる。

本書は，アルコホリズムの論考であるが，不登校やひきこもりなどの臨床，ゲーム依存などの依存の問題，さらには家族の問題と権力勾配などの実臨床の問題と通底している問題を提示している。「意志の問題」と断じられ，医療と福祉の狭間に陥り，疎外されているクライアントを思い起こし，心理士にこそ，それを繋いでいく役割があるのではないかと，そんな希望と期待も抱かせる読後感であった。